

Executive Comment

BS デジタル放送の一層の発展に向けて

NHK 技術局長 永井 研二

1973年 慶應義塾大学大学院終了、NHK 入局。
山形放送局を経て、1977年から技術局計画部に所属。
名古屋放送局企画総務室長、技術局送信技術センター長、
技術局計画部長を経て、2005年4月技術局長に就任。



この 8 月末に BS デジタル放送の普及数が 1000 万を越えました。

内訳は、BS デジタル受信機が合計で 830 万台、ケーブルテレビ経由でアナログ視聴している世帯数が 183 万世帯で、合計すると 1013 万となります。

日本の BS デジタル放送は 2000 年 12 月にスタートしましたから、4 年 9 ヶ月で普及数 1000 万を突破したことになります。これは BS デジタル放送に関わる多くの関係者の努力の賜物だと思います。

ソフト面では、ハイビジョンの高品質な映像音声を活かした魅力ある番組づくりが、また、この間シドニー、アテネオリンピック、日韓ワールドカップサッカー、アメリカ大リーグ野球などの大きなイベント放送も普及に拍車をかけたものと思われます。

また、ハード面では、放送電波の確保や安定運用に関わる技術者たちの熱意と、さらに、デジタル受信機の低廉化など放送事業者、製造事業者が一体となって取り組んできた成果にほかなりません。

ここで日本の衛星放送の歴史を振り返ってみます。

人工衛星による初の日米間テレビ中継実験が 1963 年リレー衛星 1 号を使用して実施されました。実験で届いた映像がケネディー大統領暗殺のニュースであったのはあまりにも衝撃的なことで、まさに世界の出来事が生の映像でお茶の間に届けられる象徴的な実験となりました。

一年を経ない、1964 年の東京オリンピックでは、シンコム衛星 3 号を使用した日本の技術開発による史上初の衛星カラーテレビ生中継が日本から欧米に向けて行われました。

そして翌年の1965年には、当時のNHK前田会長が放送衛星の開発意向を明らかにし、国の宇宙開発計画に連携した開発・導入に進むことになりました。

衛星放送は、およそ20年後の1984年に実現します。2チャンネルの放送開始を目指しBS-2aは見事に打ち上げられましたが放送開始前の試験で次々とTWTに故障が発生、急遽1チャンネルの試験放送でスタートせざるを得ないことになりました。その後も、重なる打上失敗、機器の故障に見舞われますが、関係者の総力を結集した対応が実り、現在の衛星放送の発展へとつながります。

ハイビジョンの研究開発も衛星放送の普及に一役を担っています。東京オリンピックに前後して始まったハイビジョンの研究はカメラからVTRなどのスタジオ機器、そして家庭用受信機のディスプレイとして研究を進めてきた夢の壁かけテレビも、今や液晶テレビやプラズマテレビとして実用化され、視聴者の購買意欲を刺激しています。

このように今日の衛星放送の普及は、多くの諸先輩たちが次々と新たな課題や困難に挑戦し、失敗を乗り越えて挑戦し続けてきた、血と汗と涙の結晶であると痛感させられます。

折りしも今年2005年は放送開始80周年にあたります。この記念すべき年に、BSデジタル放送普及1000万を達成し感慨深いものがあります。80年経った今、放送業界では、地上テレビジョン放送のデジタル化が着々と進められています。BSデジタル放送は、放送のデジタル化の先駆者としての役割を果たしています。今後は2006年ワールドカップドイツ大会、2008年北京オリンピックなどのビッグイベントを契機にデジタル放送の一層の普及が期待されます。

放送技術者としては放送電波の確保、安定運用など視聴者の期待を裏切らない努力がますます重要となってきます。さらに、BS放送では、アナログ放送終了後のチャンネルのデジタル化やWRC2000で新たに割り当てになった追加4チャンネルの利用など検討すべき課題も多くあります。

新たな課題への挑戦とともに、放送電波の確保、安定運用などBSデジタル放送の一層の発展に向けて、今後も業界全体が一体となって取り組みを進めていただくことをお願いいたします。